

管内 A 農場におけるトルトラズリル製剤の臨床的効果と事故軽減

阪神基幹家畜診療所 八多診療所

泉 弘樹 小田修一 大山一郎

函師尚子 野口 等

子牛の下痢症は発生率が高く、他の疾病との合併症や重症例では発育遅延や飼料効率低下をもたらす経済的損失は大きい。そこで今回は下痢の中でもコクシジウムに起因する腸炎に注目し、交雑種哺乳肥育一貫経営の管内 A 農場において、2009 年 9 月から導入子牛へのトルトラズリル製剤（バイコックス：バイエル薬品株式会社）の単回投与を開始し、その有用性について検討した。

材料および方法

1. 対象農場：交雑種肥育 A 農場。約 400 頭を 4 名で飼養管理。
哺乳子牛（ 26.1 ± 7.7 日齢）を導入後個別管理し、その後約 1 ヶ月間哺乳口ボット畜舎にて飼育。それ以降をパドック牛舎にて管理する。
呼吸器病対策として牛 5 種混合生ワクチンと *Mannheimia haemolytica* ワクチンの接種を行っている。
2. 調査期間：2007 年 9 月～2010 年 8 月
3. 投与方法：2009 年 9 月以降、導入 3 日目にトルトラズリル製剤 15 mg /kg を代用乳に混ぜ経口投与。
4. 調査内容：肥育用子牛における腸炎の発症状況を診療簿より調査し、導入数に対する腸炎による病傷事故発生率、全疾病数に対する腸炎の占める割合、診療 1 件当たりの診療費、について投与開始前後で比較した。

結 果

1. 導入数に対する腸炎による病傷事故発生率は 1 年毎に投与前 13.6%（2007 年 9 月～2008 年 8 月）、9.1%（2008 年 9 月～2009 年 8 月）から投与後 4.5%（2009 年 9 月～2010 年 8 月）に減少した。
2. 全疾病数に対する腸炎の占める割合は投与前 18.5%、12.1% から投与後 3.9% へと有意（ $p < 0.01$ ）に減少した。
3. 診療 1 件当たりの診療費は投与前 9,616 円、9,230 円から投与後 6,834 円へと有意（ $p < 0.01$ ）に減少した。

まとめ

トルトラズリル製剤の投与は、発症前の単回投与で臨床症状ならびにオーシスト排泄抑制に効果が得られるとされている。今回調査を行った A 農場では、導入 7 日目から約 1 ヶ月間を過ごす哺乳口ボット畜舎における下痢が多発しており、その予防として導入 3 日目にトルトラズリル製剤を投与した結果、従来の方法に比べ省力化と疾病の発生が抑えられた。以上より A 農場における腸炎予防対策として、導入 3 日目のトルトラズリル製剤単回投与は有効であると考えられる。